

Aaron's Rod: 「力の衝動」への服従

内 藤 歓 修

I

1914年7月末に勃発した第一次世界大戦によって興奮状態に陥っていたイギリスは、翌1915年11月13日 *The Rainbow* を猥褻出版として発売禁止にした後、徐々に D. H. Lawrence の生活に圧迫を加えて来る。1916年6月には、初年兵扱いで身体検査をされるが、Lawrence はそれではねられ、帰宅を許される。この間、彼の反戦的言動や妻 Frieda がドイツ人であることなどで、戦時下の官憲の圧迫は厳しく、更に Lloyd George 内閣成立以後は益々厳しくなるばかりであった。その為、彼は健康の悪化、財政の逼迫など、幾つかの理由を以て、イギリスから出て行こうとするが、パスポートの申請許可は降りなかった。1917年6月には二度目の徴兵検査を受けるが、健康が優れず失格となる。10月12日にはコーンウォールの海辺の家に、突然官憲が乱入して来て家宅捜索をし、三日後にはこの地方を退去し、以後禁止地域には居住してはいけない、そして警察に報告を怠ってはいけないと、命令して行ったのである。その後もスパイとしての容疑は簡単には晴れずに、官憲にずっと付け回されるのである。大戦終結直前にも三度目の徴兵検査を受けさせられた Lawrence は、その終わりを知った時には、大いなる解放感を味わったのである。

コーンウォール地方からの強制退去事件は、Lawrence の心に大きな衝撃を与え、人間不信の念を強くし、人間関係に絶望させてしまう程であった。彼は心身共に疲労の極に至り、やつれ果てた姿でロンドンに逃れ、従軍中の Richard Aldington の留守を守る Hilda Doolittle の好意により、彼女のメクレンブルグ・スクウェアのアパートの一室にフリーダと共に身を落ち着けることが出来た。

やっと、例え一時的であったとしても、安息の場所を得た Lawrence は、少しずつ創作活動を継続させて行くが、大戦勃発以来、彼の身の上で起こった不幸な出来事は、彼の創作意欲をすっかり減退させてしまった。彼の全力を傾けた作品 *The Rainbow* が発売禁止となって、身辺の環境が悪化した辺りからこの徴候は現れた。そして戦局が進むにつれて、彼の身辺に対する国家権力の介入が厳しくなると、それは益々はっきりとして来た。困難な生活環境を反映して、彼の心は人間に対する興味を失い、人間嫌いになってゆき、その結果、興味の対象は哲学に向けられた。J. M. Murry への手紙で次の様に言っている。

Philosophy interests me most now—not novels or stories. I find people ultimately boring: and you can't have fiction without people. So fiction does not, at the bottom, interest me any more. I am weary of humanity and human things. One is happy in the thoughts only that transcend humanity.

身の不愉快な事件は、彼の興味を形而下的な実生活や人間関係の煩わしさから、形而上的思考に向かわせた。彼の言う通り、最早彼の興味は創作にはなく、⁽⁴⁾ 彼独自の思想の中に没入して行く。

1918年11月に大戦が終息すると、Lawrenceの身に漸く静けさが戻って来た。しかし、この大戦のために彼の受けた痛手は、精神的にも肉体的にも大きく、戦争終了後も容易には癒されることはなかった。終戦前から、経済的に逼迫した状態を脱出し、自分の考えていた楽園を作ろうという夢を持って、彼はアメリカに渡りたいと切望していた。完成してはいても出版出来る目処も立っていない *Women in Love* や他の短編小説などを、彼の地で出版したいという思いからであった。

I don't think America is a paradise. But I know I can sell my stories there, and get a connection with publishers. And what I want is for us to have sufficient to go far west, to California or the South Seas, and live apart, away from the world. It is really my old Florida idea—but one must go further west. I hope in the end other people will come, and we can be a little community, a monastery, a school—a little Hesperides of the soul and body. That is what I will do, finally...

But in the end, I will go far away and make a little new world, like a seed which drops in a fertile soil, and germinates with a new earth and a new heaven. I don't believe in practical life, nor this materialism, nor in submitting to falsity because there is nothing else to do.

と1917年1月8日付け Lady Cynthia Asquith への手紙で述べているように、⁽⁵⁾ Lawrenceはアメリカに新天地を見いだそうと考えていたが、この英国脱出の希望が叶ったのは、この時から三年近く、また終戦後一年もたった1919年11月14日のことであった。それも結局向かった先はアメリカとは方向違いのイタリアはシシリー島タオルミーナであった。ここを暫くの安住の地と定め、彼は再び創作活動を開始することとなった。

終戦をはさんで、彼は1917年8月から1918年6月の間には *Studies in Classic American Literature* を、また1918年8月から1919年1月にかけて、オクスフォード大学出版局から依頼されていた *Movements in European History* を書き上げた。更にタオルミーナへ行く途中で過ごしたカプリでは *Psychoanalysis and the Unconscious* (1919年12月—1920年1月) を、次にタオルミーナでは *Fantasia of the Unconscious* (1921年5月—7月) を完成したのである。これら一連の「哲学的」エッセイは Lawrence 独自の世界観、宇宙論、及び人間に対する考察を展開させた、彼の面目躍如たるものであった。

これらの著作に於て、独自の「哲学的」理論を展開し、構築した Lawrence は、この思想を小説の中に生かそうとした。虚構の世界でとはいえ、彼は自分の小説の登場人物に自分の思想を語らせ、実践させようとした。そしてその思想は現実の世界においても、整合性を持ち、矛盾がないことを示そうと試みたのである。

この時期に彼は二つの長編小説を書いている。*The Lost Girl* と *Aaron's Rod* である。これらの二編は一時期に継続して一気に書かれたものではなく、前者は1913年1月中旬頃から3月迄ドイツで書かれた。その時期が *The Rainbow* と *Women in Love* の前身である *The Sisters* 着稿直前であったため、それに Lawrence が意識を集中し始めた後、自然とこの作品は未完のままに捨てておかれるようになった。その草稿はドイツに長らく置き去りにされたままになっていたが、そこから取り寄せられ1920年2月12日に再び着稿されて、同年5月5日には脱稿となった。

一方、*Aaron's Rod* は1917年12月にはロンドンのメクレンブルグ・スクウェアで着稿された⁽⁶⁾。しかし当時「哲学的」思考に耽る Lawrence には小説創作にはなかなか身が入らず、1919年9月迄は断続的に書き継いでいたが、やはりこれも暫くの間未完のままに打ち捨てられてしまった。だが、シシリー島のタオルミーナでほぼ申し分のない生活を享受出来るようになった Lawrence は、1920年7月、*The Lost girl* 脱稿の直後、再度 *Aaron's Rod* に着稿することになった⁽⁷⁾。そして翌年5月には脱稿している⁽⁸⁾。

この様に、一度書き始められて中断し、その後或る期間を置いて、再び書き始められて、少しの時期的ずれがあるだけで同じ場所や生活環境に於て完成された両作品であるが、その内容の持つ性格はかなりの相違がある。*The Lost Girl* は男性と女性の関係を描いたもので、前作 *The Rainbow* や *Women in Love* の系譜を継ぐもので、最後の長編 *Lady Chatterley's Lover* に直接につながる作品であるのは明かである。一方、*Aaron's Rod* は当時の Lawrence の「哲学的」思索の結論を *The Lost Girl* を経て、より明確に提示し始めた最初の作品となっている。

作者 Lawrence はこの作品以後、男性同士の関係を男女の愛を越えた次元で描くことになる。即ち、この *Aaron's Rod*、及び *Kangaroo*、*The Plumed Serpent* の三つの作品で、Lawrence は男性間の結合のあり方を追求しているのである。そして *Aaron's Rod* がその最初の作品であり、*Women in Love* の Birkin と Gerald の関係で提示された男性同士の結合のあり方を更に深く追求して行くことになる。これがこの時期の Lawrence の「哲学的」著述の、小説の世界を通じた具体的な表現でもあった。

II

The Trespasser を除く、これ迄の全ての長編小説と同様に、この *Aaron's Rod* も作者の故郷と同じミッドランズの炭坑町から物語は始まる。主人公 Aaron Sisson は32歳、金髪の美男子で仕事は炭坑の計量係である。小説の冒頭は彼が炭坑夫組合の討論集会の後、苛立った気持ち

で夕方遅く帰宅する場面である。今や大戦も終了し、「どことなくほっとした安堵感のようなもの」が辺りに漂っていたが、Aaron にはそれが今度は「別な脅威」になりそうであった。

時はクリスマス・イヴ。二人の小さな娘はクリスマス・ツリーの飾り付けで大騒ぎをしている。その時、娘によって彼の子供時代から大事にしていた青いガラスの飾り玉が壊されてしまう。その心の動揺を鎮めようと、彼は部屋の片隅で一人フルートを演奏する。精妙な音楽が彼の気持ちを幸せなものにした。

夜七時頃、彼は酒場に行くために身支度する。彼は自由な行動が出来るのに、自分は家事や子育てに縛られて身動き出来ないのは、余りにも不公平だと妻は考える。

He had an unfair advantage—he was free to go off, while she must stay at home with the children.

“There’s no knowing what time you’ll be home,” she said.

“I shan’t be late,” he answered.

“It’s easy to say so,” she retorted, with some contempt. He took his stick, and turned towards the door.

“Bring the children some candles for their tree, and don’t be so selfish,” she said.

“All right,” he said, going out.

“Don’t say *All right* if you never mean to do it,” she cried, with sudden anger, following him to the door.

His figure stood large and shadowy in the darkness.

“How many do you want?” he said.

“A dozen,” she said. “And holders too, if you can get them,” she added, with barren bitterness.

“Yes—all right,” he turned and melted into the darkness. She went indoors, worn with a strange and bitter flame. (Chap. I)

この夫婦間の、何処にも有りがちな小さな感情のもつれを表す微妙な会話のやり取りは、言葉の表面上に表される意味よりもずっと深い意味を持っており、それだけ一層、Aaron 夫婦の間の亀裂が大きいことを暗示している。

何時でも好き勝手な時に、家庭の煩わしさから逃避して、気晴らしをするために外出出来る夫を、家庭に束縛されて自由に行動出来ない妻は、嫉妬と羨望の混ざり合った言葉で攻撃する。夫はそんな煩わしさや、しがらみを断ち切るように急いで闇の中に身を隠す。ここ迄はよくある夫婦の葛藤であろうが、Aaron の場合、これきり家に帰らなかったのである。

娘に頼まれたロウソクを買ってから、酒場に行くが、この様な精神状態では、Aaron はウィスキーにも、女にも、そして音楽にも心を開くことが出来ず、楽しめなかった。彼の心の中には堅い反逆的なものがあって、どんなものでもそれを解きほぐすことが出来ない。目の前には空虚で不満足な生活しかないと強く感じるに従って、Aaron は氷の如き憤怒に捉えられ、錯乱した気分になる。それでそこから脱出出来るかもしれないという微かな期待を抱いて、ニュー・ブラ

ンズウィックの炭坑に通じるショトル通りに足を踏み入れて行く。

この通りの一方の端にある、炭坑会社の共同経営者 Alfred Bricknell の屋敷ショトル・ハウスに、Aaron は偶然に招き入れられ、当家の期待の担い手 Jim Bricknell、その婚約者 Josephine Ford、Jim の妹 Julia 等、今後の Aaron の新しい世界への旅立ちに手助けとなる人達と知り合うこととなる。クリスマスから数日後、Aaron はこっそり家に戻ってみる。娘の Marjory が病氣らしい。家族に対する懐かしい気持ちと、病気の娘に対するかわいそうな気持ちとで、妻と和解し家にこのまま留まってもいいと思いはじめますが、妻が往診していた医者にか出した自分への非難を強い調子で訴え掛けるのを聞いて、心が冷えてしまう。自分がまるで塩の柱になってしまったかのように感じ、更に鏡で見た顔は真っ青で、幽霊のようで、本物の犯罪者になってしまったかのような卑屈な気持ちになる。結局、そのまま重苦しい堅い心で家を去った。

ロンドンのオペラ劇場でフルートを演奏している Aaron を、偶然にそこにやって来た Bricknell 家の人々が見つかり、Jim の下宿に連れて来る。ここで Aaron は Lilly という文学者とその妻 Tanny に紹介される。心の中が空洞化し、自己を見失ってしまっている Jim は、生きる依り所として「愛」を求めている。⁽⁹⁾ 人に愛されたい。特に女性に愛されたい。自分にとって「愛」は「生命」であり、「魂の呼吸」だと彼は主張する。この様な彼の言葉をたしなめることによって、Lilly は現代人における愛についての思想に、辛辣な批評を加え、文明批評家としての姿をかいま見せる。

Aaron に興味を抱いた Josephine は、或る日曜日の夕方、彼をソーホーのレストランに夕食に招く。話しているうちに Josephine は Aaron に妻子を捨てて家出をした理由を尋ねる。

“But you couldn't leave your little girls for no reason at all—”

“Yes, I did. For no reason—except I wanted to have some free room round me—to loose myself—”

“You mean you wanted love?” flashed Josephine, thinking he said *lose*.

“No, I wanted fresh air. I don't know what I wanted. Why should I know?”

“But we must know: especially when other people will be hurt,” said she.

“Ah well! A breath of fresh air, by myself. I felt forced to feel—I feel if I go back home now, I shall be *forced*—forced to love—or care—or something.” (Chap. VII)

更にこの二頁ほど後では、“I like being by myself—I hate feeling and caring, and being forced into it. I want to be left alone—”と言っている。この言葉は彼が心の中に自分独自の世界を持っており、他の人に己の生き方や精神的な世界を干渉されたくないと強く考えている表れであろう。この章の冒頭の頁で Aaron の人間性についての筆者の説明がある。

He had a curious quality of an intelligent, almost sophisticated mind, which had repudiated education. On purpose he kept the midland accent in his speech. He understood perfectly what a personification was—and an allegory. But he preferred to be illiterate. (ibid.)

知性はあっても無教育であると人に思われた方が、煩わしくなくていいと考えているのであろう。自分の世界をしっかりと守り、人から支配されたくないのである。

Aaron と Lilly は一度面識を持ったにも拘らず、なかなか行動範囲が重なり合わないが、漸くその時がやって来る。妻 Tanny が本国ノルウェーに行っている間、Lilly はコヴェント・ガーデンの市場を見おろす部屋に住むことにした。四月初旬の或冷たいどんより曇った午後、Lilly が窓から外を見ていると、黒いオーバーと山高帽の Aaron が、ふらついて歩いていた。Aaron はインフルエンザにかかっており熱が高かった。Lilly は彼を自分の部屋に連れて来て、ベッドに寝かし看病してやる。Aaron は Josephine の誘惑に負けてしまい、その情交で魂を吸い取られ喪失してしまったようになり、身体的にも衝撃を受け病気になってしまう。Josephine は「愛」を信じることが出来ないで、ボヘミアン的な生活を送っている現代女性である。自己を確保し、自己の核心を他の誰にも渡すまいと、妻 Lottie からも逃れて来た Aaron は、このような Josephine を愛していると思った途端に、心身共に「やられて」しまったのである。そして、恐怖、抑圧された怒り、惨めさ、自己嫌悪などが一体となって、Aaron の気持ちをかき乱し、病の症状を重くして行った。

Lilly は医者にみせても少しも回復しない Aaron の、下半身を裸にして、樟脳の入ったオイルでその全体を拭き、マッサージをしてやる。すると病人の瞳に輝きが戻り、静かに眠っていった。Aaron は二時間も眠ると、熱も下がり、かなり元気になって来る。

やっと元気になった Aaron に、Lilly は自分の結婚観や女性達の愛の認識についての意見を示す。彼は結婚について疑いを持っている。

“Why?”

“Oh, I don't know. There's something with marriage altogether, I think. *Egoïsme à deux*—”

“What's that mean?”

“*Egoïsme à deux*? Two people, one egoism. Marriage is a self-conscious egoistic state, it seems to me.” (Chap. IX)

この自意識過剰の状態で、女性が子供を生むとどうなるか、Aaron は興奮して言う。

“It's a fact. When a woman's got her children, by God, she's a bitch in the manger. You can starve while she sits on the hay. It's useful to keep her pups warm.”

“Yes.”

“Why, you know—” Aaron turned excitedly in the bed, “they look on a man as if he was nothing but an instrument to get and rear children. If you have anything to do with a woman, she thinks it's because you want to get children by her.—And I'm damned if it is. I want my own pleasure, or nothing: and children be damned.” (ibid.)

一方 Lilly は子供を生んだ女性は、家庭内で実権を握り、男性の冒険する魂、反逆する精神を窒息させてしまう、また女性は男性を子供を手に入れるための単なる道具としてしか見ていな

い、と説く。二人は考え方が根本で一致する点を見出し、Aaron は Lilly の持つ不思議な魅力に引かれ始める。

では人間の間ではどうしたら理解し合えるのであろうか。Lilly はその方法を自分なりにしっかりと持っている。

“I’m learning to possess my soul in patience and in peace, and I know it. And it isn’t a negative Nirvana either. And if Tanny possesses her own soul in patience and peace as well—and if in this we understand each other at last—then there we are, together and apart at the same time, and free of each other, and eternally inseparable. I have my Nirvana—and I have it all to myself. But more than that. It coincides with her Nirvana.” (Chap. X)

要するに、“The possessing one’s own soul—and the being together with someone else in silence, beyond speech.”ということだと Lilly は言う。この考えは当然 *egisme à deux* とは対極にあり、これを男女間、ひいては人間同士の理想的な結び付きと Lilly = 作者 Lawrence は考えているのであろう。そしてこれは *Women in Love* で Birkin が説く愛の哲学でもある。尤も Lawrence のもう一人の分身 Aaron はこれを “Sort of sit on a mountain top, back to back with somebody else, like a couple of idols” などと半分からかい気味に尋ね、Lilly の説明に対する理解から程遠い所にいることを暗示している。しかし Lawrence は二人は「相手の事を薄気味悪いほどよく分かった」と述べている。

The two men had an almost uncanny understanding of one another—like brothers. They came from the same district, from the same class. Each might have been born into the other’s circumstance. Like brothers, there was a profound hostility between them. But hostility is not antipathy. (ibid.)

作者 Lawrence は自分の思想を説くために、この物語では Lilly と Aaron を登場させている。二人とも Lawrence の分身と言ってよい。表面上彼らの性格付けは相違点が多いが、上の引用文のように、二人は根底ではつながっており、最終的には殆ど同一人物に収束してしまう、一種のドッペルゲンガー的な、相互に分身の関係にあると言えよう。

Aaron は家出の理由を Josephine に説明するにも、「自分が何を欲していたのか分からない」とも言っているように、その行動様式は背景に明確な思想、あるいは信念を持っているものではなく、多分に無意識的、衝動的である。そのため「彼の家出」という、この物語で重要な意味を持つ行為も、作者はいろいろとその理由付けをしているにも拘らず、読者に対して説得力を持ったものとして迫って来ない。彼は自己の魂が要求している、人間本来の自然な生き方を、既存の社会的制約に捕われずに、無意識的にしていると言えよう。これは当時の作者の、生身を持つ人間としての、より正直な心情を写しているのである。それ故、Aaron は物語に於ても、時間的な進行に合わせて、比較的忠実に描かれており、Lilly がいわば全知全能の神の如く変幻自在に出没するのと比べると、実在的で等身大の姿を表している。彼は実際の生活者で職業もはっきり

していれば、家庭もあり、妻子もいる。無意識とは言え、男の自由を求め、自己発見の為に家庭を捨てたということは、心の何処かで、意識の底のはっきり認識することの出来ない所で、苦悩を味わっていたということであろう。

一方 Lilly も作者 Lawrence の分身であるが、作者の願望に近い理想を語り、Aaron の無意識から出た行動に理論的背景を与える人物として設定されている。彼は Aaron の精神的苦悩を、癒し、真の男性としての哲学を伝えようとする。だが彼には生活者としての現実味が殆どなく、生活背景もはっきりしない。結婚して妻はいるが、職業は作家と言うだけで、生活の臭いは漂ってこない。しかも物語には、断続的にしか現れずに、そこでは彼独自の哲学を語る事が多く、それ故彼の視点から小説の具体的な筋を追うことは殆ど不可能となっている。即ち、Lilly の存在は現実生活から遊離しており、作者 Lawrence の観念の所産と考えられる。当時の Lawrence の完成途上の、未分化な思想の姿を Lilly がそのまま受け継いでいるため、その実在性が甚だ希薄になってしまっているのは否めない。

だが生身を持ち、実生活上では必ずしも自分の考え通りに物事が運ばないことを痛感している Lawrence の分身である Aaron は、Lilly と別れ、再びイタリアで会う迄、未だ幾つかの経験を重ね、Lilly の哲学を受け入れる土壌を作っておかなければならない。

九月初旬に Aaron は妻 Lottie のもとに戻ってみた。和解が行われるかと淡い期待を持って、Lottie と会ったが、顔を合わせた当初から非難と攻撃、そして謝罪を求める言葉が続くだけであった。彼女は彼が何故自分の許を去ったのか理解できず、一方的に夫の不実を責める。そして夫の太股に抱きつき、情欲を掻き立てて彼に非を認めさせようとする。妻が狡猾な手管を弄し、甘美な言葉で魅惑し、夫に自己を裏切らせようとしているのが分かって、夫は冷やかな反感を込めてそれを振り払う。妻は敗退する積もりはなく、夫も決して屈服する積もりがなかった。妻の許を再び逃れた Aaron は星空を見上げながら、「愛の幻影」が去ってしまったことに深く思いを馳せる。

The illusion of love was gone for ever. Love was a battle in which each party strove for the mastery of the other's soul. So far, man had yielded the mastery to woman. Now he was fighting for it back again. And too late, for the woman would never yield.

But whether woman yielded or not, he would keep the mastery of his own soul and conscience and actions. He would never yield himself up to her judgment again. He would hold himself forever beyond her jurisdiction.

Henceforth, life single, not life double. (Chap. XI)

Aaron は新しい天地を求め、また Lilly の後を追ってイタリアに発ち、ノヴァーラに着く。彼は Sir William Franks の邸で Lilly と落ち合うことになっていたが、Lilly は既に数日前にここを発ってしまっていた。Aaron はここで週末を過ごさせてもらい月曜日に発つことにする。

Sir William は親から引き継いだ特権もなく、自力で社会で成功し、現在の富と名譽を築き上げた紳士であり、この物語で「一般的な常識人」として Aaron のその生き方に言及する殆ど唯一の人物である。その彼は Lilly の説く「神」は人生を不幸に導く危険な思想と批判し、自分としては神プラス銀行預金を勧めると言い、Aaron にこの世で一番大事なことは経済的自立であると主張する。この様な通常の「道德判断」の持ち主の基準から見れば、Aaron の家出という行動は到底容認出来るものではなからう。

“It is certainly a good thing for society that men like you and Mr. Lilly are not common,” said Sir William, laughing. (Chap. XII)

Sir William はこの様に穏やかに Aaron の「反社会的」行動をたしなめるが、Aaron が家出の理由を “There were no grounds.” とか “A natural event” とか言うのを聞くに及んで Lady Franks は “I think you are just in a wicked state of mind.” “You are really heartless.” “I disapprove of your way of looking at things together. It seems to me altogether cold and unmanly and inhuman.” などと Aaron を非難する。この言葉には流石の Aaron も衝撃を受け、自分の部屋に戻っても、 “His hostess’s admonitions were like vitriol in his ears.” という気持ちに陥ることが避けられなかった。

次の朝一人 Aaron は Lottie との十二年間の結婚生活、家出に至る迄の経過、そして放浪の旅などについて、自分の来し方行く末に思いを馳せる。

Lottie も Aaron も自分を「第一の、そして単一の存在」と考えており、Aaron が妻も自らをそのように考えていることを知ったのは結婚後数年してからであった。

First and single he felt, and as such he bore himself. It had taken him years to realise that Lottie also felt herself first and single: under all her whimsicalness and fretfulness was a conviction as firm as steel: that she, as woman, was the centre of creation, the man was but an adjunct. She, as woman, and particularly as mother, was the first great source of life and being, and also of culture. The man was but the instrument and the finisher. She was the source and the substance.

Sure enough, Lottie had never formulated this belief inside herself. But it was formulated for her in the whole world. It is the substantial and professed belief of the whole white world. She did but inevitably represent what the whole world around her asserted: the life-centrality of woman. Woman, the life-bearer, the life-source. (Chap. XIII)

女性こそが生命の中心、生命の担い手であり、その根源であるというのは、全世界的に形作られた信念であり、全白人社会の中で実質的に公言された信念となっている。女性の生産的で、宗教的な魂が正しいと男性は認めているのである。それ故、例え男性がこの女性の聖なる優越性に反抗心を抱き、その反動から女性を呪ったり、売春婦の許へ駆け込んだり、酒に溺れたりしても、男性はただ自分の崇拜する神を汚すことしかしていないのである。女性を汚すことは、結局女性

を崇拜し、恐れていることの裏返し行為でしかない。

だが Aaron の中には別の種が蒔かれており、女性を崇拜出来ないというより、崇拜しようとする精神が芽生えていた。夫の哀調に溢れる忠誠を誓うような愛の底にも、自分を明け渡したくないという男の傲慢さを妻は見逃しはしなかった。その妻の心の中には、夫は自分に従わなければならない、従ってくれば、自分は情け深い愛情で夫を完全に包み込んでいとおしんでやるという本能があった。そして夫は妻のこの様な情け深い愛情の中に完全に包み込まれることによってこそ、心からの感動を味わえるというのが、Lottie の結婚観であった。これは彼女にとって観念ではなく、むしろ深い感動と本能であった。彼女の生きて来た時代が彼女の心の中に育てて来た本能であったのである。

それにも拘らず、Aaron は Lottie を、麗々しい愛情の仮面を被りながら、結婚の初夜から踏みこみ過ぎてしまった。Lottie は意識的な心は騙されても、深い無意識の本能迄は騙されることはなかった。彼女は Aaron の美しさにかんじがらめに捉えられてしまい、彼を気も狂わんばかりに愛していたのに、彼は彼女に自分自身の中心を与えてくれない。余りの苦しさに彼女は気違い女になってしまった。

It was that, after their most tremendous and, it seemed to her, heaven-rending passion—yea, when for her every veil seemed rent and a terrible and sacred creative darkness covered the earth—then—after all this wonder and miracle—in crept a poisonous grey snake of disillusionment, a poisonous grey snake of disillusion that bit her to madness, so that she really was a mad woman, demented. (ibid.)

Aaron は Lottie が求めても、自分の中核を与えてくれないばかりか、彼女の素晴らしい情熱的な魂、彼女の神聖な性の情熱をだましたり、弄んだりしたのである。

He never gave himself. He never came to her, *really*. He withheld himself. Yes, in those supreme and sacred times which for her were the whole culmination of life and being, the ecstasy of unspeakable passional conjunction, he was not really hers. He was withheld. He withheld the central core of himself, like the devil and hell-fiend he was. He cheated and made play with her tremendous passional soul, her sacred sex passion, most sacred of all things for a woman. All the time, some central part of him stood apart from her, aside, looking on. (ibid.)

世の男性に崇拜されるべき聖なる優越性を持ち、生命の根源である女性、その中でも情熱的で気の強い女性 Lottie。その彼女が「道具であり、仕上げ工」でしかない男性である夫を相手に、彼を丸ごと手に入れようと、燃え上がった。だが、結果は彼女の虚しい屈辱的な一人相撲に終わってしまった。

... poor Lottie, no wonder she was as a mad woman. She was strictly as a woman demented, after the birth of her second child. For all her instinct, all her impulse, all her desire, and above all, all her *will*, was to possess her man in very fulness

once : just once : and once and for all. Once, just once : and it would be once and for all.

But never ! Never ! Not once ! Never ! Not for one single solitary second ! Was it not enough to send a woman mad. Was it not enough to make her demented ! Yes, and mad she was. She made his life a hell for him. She bit him to the bone with her frenzy of rage, chagrin, and agony. She drove him mad too : mad, so that he beat her : mad so that he longed to kill her. But even in his greatest rages it was the same : he never finally lost himself : he remained, somewhere in the centre, in possession of himself. She sometimes wished he would kill her : or that she would kill him. Neither event happened. (ibid.)

夫が自分に従わないのなら、自分を殺して欲しい。さもなければ夫を殺したい。ここ迄思い詰めても、Lottie は夫に従うことは出来ない。Aaron が従わなければならないのである。

He must yield. That was written in eternal letters, on the iron tablet of her will. *He must yield.* She the woman, the mother of his children, how should she ever even think to yield ? It was unthinkable. He, the man, the weak, the false, the treacherous, the half-hearted, it was he who must yield. Was not hers the divine will and the divine right ? Ha, she would be less than woman if she ever capitulated, abandoned her divine responsibility as woman ! No, *he must yield.* (ibid.)

それ程苦悩に捕われるならば、従おうとしない夫と別れ、身を引いてしまえばよいのだろうが、夫の美しさに魅了されている Lottie は、夫を捨てて離れて行くことが出来ない。二人の関係は暗礁に乗り上げてしまうが、Aaron にはやがて自分が妻に叩き潰されてしまうだろうという予感がある。

He realised, somehow, that at this terrible passive game of fixed tension she would beat him. Her fixed female soul, her wound-up female will would solidify into stone—whereas his must break. In him something must break. It was a cold and fatal deadlock, profitless, A life-automatism of fixed tension that suddenly, in him, did break. His will flew loose in a recoil : a recoil away from her. He left her, as inevitably as a broken spring flies out from its hold.

Not that he was broken. He would not do her even that credit. He had only flown loose from the old centre-fixture. His will was still entire and unabated. (ibid.)
Aaron は妻に自分を全面的に明け渡す積りはなかった。自分は一人であるということこそ、人間存在の中心であり本質である、そしてその中心を砕いてしまえば、あらゆるものを壊してしまうことになる。自己を屈服させることは、決定的な冒瀆であり、自分の最奥の魂を拒否することであると、Aaron は思う。これが自分の家出の原因であったと彼は悟るのである。

「愛の幻影は永久に消え去った」と見極めた Aaron は、今や愛の真の姿が見えて来る。

Now he realised that love, even in its intensest, was only an attribute of the human soul : one of its incomprehensible gestures. And to fling down the whole soul in one gesture of finality in love was as much a criminal suicide as to jump off a church-

tower or a mountain-peak. Let a man give himself as much as he liked in love, to seven thousand extremities, he must never give himself *away*. The more generous and the more passionate the soul, the more it *gives* itself. But the more absolute remains the law, that it shall never give itself away. Give thyself, but give thyself not away. That is the lesson written at the end of the long strange lane of love. (ibid.)

この矛盾は白人社会の中にしっかりと根を下ろしてしまっている「愛の宗教」の理念に依って生まれたものである。即ち、キリスト教の時代では、“Man is the gift, woman the receiver.”であり、これは神聖な聖体拝領である。男性は全面的な聖なる自己放棄に依って自分をすっかり明け渡し、女性に受け取ってもらう。女性は男性の聖なる肉体と精神を受け取るのである。だが愛とはこの様なものではない。

Love is a process of the incomprehensible human soul: love also incomprehensible, but still only a process. The process should work to a completion, not to some horror of intensification and extremity wherein the soul and body ultimately perish. The completion of the process of love is the arrival at a state of simple, pure self-possession, for man and woman. (ibid.)

これが Lottie との十二年間の結婚生活を通じて、苦しい愛の闘争の果てに、Aaron が悟った真の愛の在り方であった。

Aaron には百合が自己完成の理想の姿に見える。百合は根を張り、生を全ての中心に置き、北風が吹こうと、湿った大地から百合の生命の泉が湧き出ようと、霜が降りようと、固定観念の重荷を背負うこともなく、単独で存在し、それ自身完全である。

One toils, one spins, one strives: just as the lily does. But like her, taking one's own life-way amidst everything, and taking one's own life-way alone. Love too. But there also, taking one's way alone, happily alone in all the wonders of communion, swept up on the winds, but never swept away from one's very self. Two eagles in mid-air, maybe, like Whitman's "Dalliance of Eagles." Two eagles in mid-air, grappling, whirling, coming to their intensification of love-oneness there in mid-air. In mid-air the love consummation. But all the time each lifted on its own wings: each bearing itself up on its own wings at every moment of the mid-air love consummation. That is the splendid love-way. (ibid.)

ここで自己完成の理想の姿を百合に見たのは、Lilly にその姿を重ね合わせようという作者の意図が当然あると考えてよからう。この Aaron の考えが長々と続く第十三章はドイツ語で WIE ES IHNEN GEFÄLLT (=As you like) となっている。これ迄の章とは趣を異にする章である。作者 Lawrence はここで先ず、二度目の帰宅で Aaron が妻 Lottie との対話を回想している状態を描いている。そして Lawrence は物語の語り手として、主人公 Aaron の心の動き、精神状態を細かく調べ、自分の経験を Aaron のそれに重ね合わせ、融合させ、Aaron の経験を自

分のものとして分析し、意味付けし、Aaron の採るべき道を示そうとしている。即ち、Aaron と Lottie との結婚生活が破局に至る迄の経過を語りながら、Lawrence は Aaron と同一人物となつて、彼の結婚生活をなぞりながら追体験し、自分独自の思想を述べているのである。これは明らかに、語り手としての作者本来の立場から逸脱した行為で、作者としての客観的な視点は完全に度外視されている。Aaron の視点は作者 Lawrence の視点となっているのである。そして作者は Aaron に、キリスト教世界に於ける「愛の世界」、即ち彼の「意義の上での世界」で、彼が被らざるを得なかつた「麗々しい愛情という仮面」を脱ぎ捨てて、真の自己の存在を回復するために新しい生活に入って行くよう導いている。Aaron の無意識の衝動に駆られてする放浪の旅を続ける意味はここにある。それ故、Sir William 夫妻の「常識的な判断」に基づく、Aaron が「神聖な」家庭を捨てたという反社会的な、道徳に反する行為に対しての非難も、彼の無意識のレベルの判断に於ては、咎められる点はなく、極く自然な出来事、当然の成行き (A natural event) であったと言えよう。

ここで明かになったように、Aaron と Lottie の関係は *Women in Love* に於ける男女の愛の葛藤の系譜とほぼ一対している。*The Rainbow*, *Women in Love* から続く、Lawrence の男女間の愛の姿は殆ど変化していない。自我の心のうちに堅く保持し、相手に従属を強要する男女の結合は如何に困難かを改めてここに確認している。また Lottie の姿を通して、Lawrence は彼には肯定出来ない、女性の自己中心的な強い自我、及び Lottie も意識の根底に確固として所持している、大いなる母としての、また生命の根源としての女性なるものに男性は全てひざまづかなければならないという観念を提示している。だが *Women in Love* 等と違うところはこの作品に於いて Lawrence は、これにしっかりと挑戦する姿勢を示している。

これは生まれてからこの方、Lawrence が絶えず悩まされて来た重要な問題である。母との関係、恋人 Jessie Chambers との関係、妻 Frieda との関係。常に自分が圧迫され、打ち負かされかねない不安を抱いて来た大問題であった。初期の長編以来、Lawrence が探求して来た男女の愛の在り方に付いての考え方が、*Women in Love* を踏まえた上で、ここに於て大きな飛躍を遂げている。男性としての自分の劣性を積極的にはねのけ、女性に対して優位に立とうと試みているのである。

異国の地イタリアで、Aaron は自分の思想的基盤の強化を計ることが出来た。これ迄の、無意識の衝動に促されて来た行動に、意味付けが与えられたのである。故国イギリスでは、妻 Lottie との家庭生活のしがらみに自由を奪われ、更に自己を妻に侵されまいとする戦いに苦しめられていたが、異国の地イタリアに来て、一時的であれ解放感に包まれたことで、社会的視野を一層拡大出来たことが、この様な彼の意識の転換に繋がったのであろう。

ミラノの Sir Franks の邸を出発する朝、Aaron は自分とのあらゆる古い関係を断ち切りたい、新しい関係は一切欲しくないという気持ちになり、より一層無の中に進んで行かなければな

らないという衝動に駆られる。冒険をするのだという静かな感じが彼の心を捉え、自己の内なる運命を遂行しようという愉快的感情を抱きながら、フィレンツェに向かう。無意識な本能が指示する Aaron の行動はイタリアに於ても作者に依って是認されるのである。

フィレンツェで Aaron はシニョーリア広場に魅了され、そこを通る度に満足感を覚える。彼は新しい自己、新しい生の衝動が、自分の中に湧き上がって来るのを感じる。フィレンツェは百合の花によって象徴される町である。百合は第十三章の Aaron の思考の中にもあったように、「完全に自分自身」で他に惑わされることがない。またその実体は実に重々しい。この町は実体である大地が大空に舞い上がったもので、しかも暗黒の、黒く恐ろしい大地を忘れないといったものである。このフィレンツェのイメージを、作者は Lilly (百合のイメージ) と重ね合わせているのであり、フィレンツェに大きな感動を覚える Aaron の、真の新しい男性としての再生は導き手 Lilly に依ってこそ行われるのだということを暗示しているのである。そして、フィレンツェには「今、花は咲いていない。だがかつては咲いていたことがあった」という言葉は、現在は全白人世界に於て男性の魂が失われてしまっているが、今後その復活の可能性のあることを Lilly が語っているのを比喩的に暗示しているのである。

フィレンツェで Aaron は Marchese Manfredi Del Torre と知り合う。この小柄な侯爵は Aaron, Lilly, Argyle 等を相手にしながら、妻 Marchesa Del Torre について次の様に語る。自分と妻の間では妻が主導権を握っている。妻は自分に常に服従を要求し、彼女の意志を全面に押し出そうとしている。女性というのは男性を自分の道具として支配し、自分に奉仕する存在、即ち自分の物と考えている。これは正にイヴであり、彼はイヴが嫌いであると言う。侯爵夫人は Aaron の妻 Lottie と全く同じ型の女性であることがここに語られている。

当の Marchesa Del Torre は Aaron を食事に招待する。彼女の姿は現代的な優雅さをたたえ、まるで悪魔のように、恐ろしい程に魅力的であった。肩や胸が見え、美しい腕が剥き出しになっている。美しい形の脚が露になった曲線に Aaron はすっかり目を奪われてしまう。戦争に活力を奪われてしまい、歌を歌うことが出来なくなってしまった侯爵夫人の伴奏を、Aaron はしてやる。すると、彼女は何年もの間「感情や道徳に依って閉じ込められた、このじめじめした恐ろしい獣のような牢獄」から、魂を脱出させることが出来、魂も声も解放されて自分の思うように歌った。今迄何年も心の中に居座っていた、あの恐ろしい深い傷跡、歌わそうとしなかった障害物は跡形もなかった。Aaron はフルートの力に依って「ちょっとした奇跡」を演じたのであった。そして二人の発する音と声は自ずから一体となり、一時的にせよ Aaron の考えるあの「鶯の中空に於ける愛の合一⁽¹¹⁾」に似た雰囲気⁽¹¹⁾に浸ることが出来た。

She sang free, with the flute gliding along with her. And oh, how beautiful it was for her! How beautiful it was to sing the little song in the sweetness of her own spirit. How sweet it was to move pure and unhampered at last in the music! The lovely ease and lilt of her own soul in its motion through the music! She wasn't

aware of the flute. She didn't know there was anything except her own pure lovely song-drift. (Chap. XVIII)

恍惚となり、忘我の状態の時、侯爵夫人は、「自由に歌い、フルートも彼女の歌声に合わせ」、「彼女はフルートのことは意識していなかった」。侯爵夫人にとって主体は飽く迄も自分であり、Aaron は自分の力を引き出してくれる道具でしかなかった。これは Manfredi の先の言葉を裏書している。一方、Aaron は勝利感に酔うのと同時に、「誇り高い、栄光に輝く」「荒々し」くもある男性の欲望が戻って来たのを感じる。

Something to glory in, something overweening, the powerful male passion, arrogant, royal, Jove's thunderbolt. Aaron's black rod of power, blossoming again with red Florentine lilies and fierce thorns. He moved about in the splendour of his own male lightning, invested in the thunder of the male passion-power. He had got it back, the male godliness, the male godhead. (ibid.)

フルート＝アロンの杖＝男根という象徴のもとで、侯爵夫人との関係ではフルートは性的武器となっている。フィレンツェで新しい男性として再生した Aaron は、彼女に男性としての欲望を抱き、肉体交渉を持つ。作者は上の引用に於けるように、Aaron の欲望に少し大袈裟でありきたりの説明を加えているが、その意図は Aaron の男性の欲望の満足にあるのではなく、彼の、侯爵夫人、或は夫人が代表する型の女性に対する失望にある。

ベッドの中での侯爵夫人は Aaron が想像していたのとは違う女性であった。日常生活では十分に成熟し切った女らしい女性に見えたが、彼の両腕に抱かれていると、まるで子供か妹のようにしがみついて来た。彼は彼女に恐怖と嫌悪を抱き、“This is not my woman.” という感じが彼の身体を貫いた。交歓の結果は惨めなものであった。彼はまるで電気にでもやられて萎え果ててしまったようになり、全身の力が殆ど無くなってしまっていた。肉体に電気が流れて生命組織が焦げてしまったように感じた。この様な不毛な肉体交渉にも拘らず、Aaron はまたもや裸の欲情に捉えられて、侯爵夫人と一夜を共にすることになる。

結果は前回と何も変わらなかった。最初の情事の時に得た印象が更に明確となっただけであった。

In some way she was not afraid of him at all. In some other way she used him as a mere magic implement, used him with the most amazing priestess-craft. Himself, the individual man which he was, this she treated with an indifference that was startling to him.

He forgot, perhaps, that this was how he had treated her. His famous desire for her, what had it been but this same attempt to strike a magic fire out of her, for his own ecstasy. They were playing the same game of fire. (Chap. XIX)

夫人が恍惚境に入るために、彼自身の個性は全く無視されている。即ち、彼は彼女にとって、彼女を満足させるための道具でしかない。彼は自分の情欲に捕られる余り、彼女に対して無防

備の姿をさらけ出していたのである。この状態は「愛の宗教」に於ける、女性＝「聖体」を拝領する女司祭、男性＝「聖体」という図式を具体化していると言える。

She was absolutely gone, like a priestess utterly involved in her terrible rites. And he was part of the ritual only, God and victim in one. God and victim! All the time, God and victim. When his aloof soul realised, amid the welter of incantation, how he was being used, —not as himself but as something quite different—God and victim—then he dilated with intense surprise, and his remote soul stood up tall and knew itself alone. There, as in her incantation she used him to curl herself up against, and again to nestle deeper into! He didn't want it, not at all. He knew he was apart. And he looked back over the whole mystery of their love-contact, and his soul saw himself, saw his own phallic God-and-victim self there lying, with her on his breast. Only his soul apart. (ibid.)

彼は「神と生贄が一つのもの」と化してしまった。これが正に、女性にとっての「聖体」の真の姿であったのである。それ故、Aaron は侯爵夫人から、真の男性的な性の充実感を得ることは出来ないと悟る。邸から外に出た時、あたかも獄舎から放された囚人のような解放感を味わった。

遡って考えれば、女性との関係でこうした状況に追い込まれたのは、Aaron にとってこれが三度目である。最初は勿論妻 Lottie との関係で、次は Jim の婚約者 Josephine Ford が相手の時である。既に述べたように、Josephine との情交後 Aaron は心身共に参ってしまう。Josephine も侯爵夫人と同種の女性である。彼女は“A woman is like a violinist: any fiddle, any instrument rather than empty hands and no tune going.” などとうそぶく現代女性である。彼女の言葉は性愛に於て、男性を「道具」として利用することを暗示しており、Aaron はその「犠牲」にされてしまっている。こうした男女の「愛」の交渉が男性の「魂」を喪失させる原因であるからこそ、彼は Josephine との交渉で「魂」に打撃を受け、それを吸い取られたように衰弱してしまった。

だが、Aaron の侯爵夫人との交渉後、作者 Lawrence が、強引な意志に依り、上の引用文の最後に“Only his soul apart.”の一文を挿入したのは、同じ型の女性と何度も交渉を持ち、三人目で辛うじて、「自分の魂を孤独の内に所有する」という、男性が達成すべき目標地点に到達することが出来たという作者の説明である。

「愛の宗教」に於て、自分が犠牲にならない迄に、精神的成長を遂げた Aaron にとって、大変衝撃的な事件が起こる。侯爵夫人と二度目に交渉を持った日の夜、彼が Lilly 達とカフェで話をしていると、テロリストの爆弾が爆発し、彼のフルートが壊れてしまう。Lilly が「アロンの杖⁽¹²⁾」と呼んだこのフルートは、Aaron にとってこれ迄重要な役割を果して来た。妻 Lottie の支配する冷やかな家庭生活に於いては、それは彼にとって唯一の自己主張の手段とも言えるものであり、家出後は生活の資を得る手だてであり、侯爵夫人に対しては「男根の象徴性」を以て、そ

の心を開き性的交渉に至った男性的生命力の象徴でもあった。彼と Lilly の関係でもこの Aaron の杖が媒介となって発展して来た。即ちこの小説のテーマの重要な鍵でもあったのである。

「アロンの杖」が壊れてしまったということは、Aaron を現実の社会に繋ぎ止める最重要な手段が喪失してしまったことを意味する。彼は呆然自失，“It was as if the reins of his life slipped from his hands...” という絶望的な気持になる。Aaron は Lilly とフルートの壊れた破片を橋から川に流す。

And the loss was for him symbolistic. It chimed with something in his soul: the bomb, the smashed flute, the end.

“There goes Aaron’s Rod, then,” he said to Lilly.

“It’ll grow again. It’s a reed, a water-plant—you can’t kill it,” said Lilly, unheeding.

“And me?”

“You’ll have to live without a rod, meanwhile.”

To which pleasant remark Aaron made no reply. (Chap. XX)

作者の“the end”という言葉は、Aaron が未だ引きずっていた「愛の様式」に於ける「女性は生命の創造者」という女性中心思想の尻尾を付けたまま生きて行く生活の終わりを意味しているのである。彼が新しい生活に入って行くためには、この「アロンの杖」の粉碎は不可欠のものであった。新しい生活とは Lilly に依って説かれるものである。それ故 Aaron の惨めな気持ちにも拘らず、上の引用の最後で、Lilly は Aaron に“pleasant remark”を発したのである。

最終章で Aaron は「不思議な夢」を見る。彼は地下世界の大きな湖をボートに乗って進んでいく。途中の浅瀬を通る時、彼は剥き出しの肘を外に出して、三度も棒杭にぶつけてしまう。最後の三度目は強烈であった。血肉を持つ Aaron のこの様な姿を目に見えない Aaron が観察している。この目に見えない Aaron は第十三章で、

His mask, his idea of himself dropped and was broken to bits. There he sat now maskless and invisible. That was how he strictly felt: invisible and undefined, rather like Wells’ *Invisible Man*. (Chap. XIII)

と表現されている、孤独の内に自己を確保した「新生」の Aaron の姿であり、血肉の Aaron は依然として「愛の宗教」の世界に留まっていた Aaron であろう。三度杭に肘をぶつけたのは、妻 Lottie, Josephine そして Marchesa Del Torre との関係に於ける挫折、或は苦悩を表すのであろう。だが血肉を持った Aaron は三度目の衝撃の後、肘を引っ込めた。“...though even now he was not aware of any need to do so.” と作者が書いているように、血肉の Aaron は「再生」への意識的な自覚には至らないにしても、元の「愛の世界」へ向かわないことは示唆されている。作者は、Lilly の説く「力の衝動」が如何に必要かということを印象付けるために、謎のような夢を Aaron に見せたのである。

行動してゆくことで、自らの生き方を示す Aaron に対して、Lilly は言葉で自分の哲学を語る

ことに終始している。最終章は「言葉」という題名が付けられ、彼の哲学が開陳されている。彼の思想の根底にあるのは、旧来からの「愛の宗教」が支配する世界、そして男性が女性に屈しその自主的精神を喪失してしまい、女性が男性の魂の支配権を一方的に握っている現状、即ち「女性こそ生命を生み出す者、生命の中心である」とする社会一般の通念に対する大きな怒りである。これは Aaron も骨の随迄苦しんで来た問題である。この様な男性にとって悲惨な状態から抜け出すために Lilly は次の様な主張をする。

“We’ve exhausted our love-urge, for the moment. And yet we try to force it to continue working. So we get inevitably anarchy and murder. —It’s no good. We’ve got to accept the power motive, accept it in deep responsibility, do you understand me? It is a great life motive. It was that great dark power-urge which kept Egypt so intensely living for so many centuries. It is a vast dark source of life and strength in us now, waiting either to issue into true action, or to burst into cataclysm. Power —the power-urge. The will-to-power—but not in Nietzsche’s sense. Not intellectual power. Not mental power. Not conscious will-power. Not even wisdom. But dark, living, fructifying power. (Chap. XXI)

彼は旧来の「愛の様式」(the love-mode)を「愛の衝動」(love-urge)と呼んで、自らの抱く新しい観念「力の衝動」(power-urge)⁽¹³⁾と比較し、「力の衝動」の優位を Aaron に説く。

人生には、愛と力という、二つの力強い大きな衝動がある。Aaron のように「愛の様式」に捉えられ、迷いながら放浪しているのは、「愛の衝動」に駆られているからであり、新しい生活に入るために真に自己の再生をするには、「力の衝動」に依らなければならない。では「力の衝動」とは何であるのか。先ずこれに付いて言えることは、自分の内なる聖霊を否定せず、「神とか教義とか掟」とかいう自分の外側にあるもので、自分を正当化してはいけない。「自分の内なる魂こそ、自分の唯一の神」である。また「生命の樹」を育てることが何よりも大切なことである。

“You are your own Tree of Life, roots and limbs and trunk. Somewhere within the wholeness of the tree lies the very self, the quick: its own innate Holy Ghost. And this Holy Ghost puts forth new buds, and pushes past old limits, and shakes off a whole body of dying leaves. And the old limits hate being empassed, and the old leaves hate to fall. But they must, if the tree-soul says so...” (ibid.)

ここで「新しい芽を吹くこの聖霊」が「欠けることのない唯一無二の自己」であり、これから内発的に湧き起って来る生命の衝動が Lilly の言う「力の衝動」である。Lilly はこれを次の様に定義している。

It urges from within, darkly, for the displacing of the old leaves, the inception of the new. It is powerful and self-central, not seeking its centre outside, in some God or some beloved, but acting indomitably from within itself. (ibid.)

更に Lilly は、「力の衝動」に依って「愛の衝動」を断罪するに留まらず、更に「力の衝動」

への服従迄主張する。

“And of course there must be one who urges, and one who is impelled. Just as in love there is a beloved and a lover : The man is supposed to be the lover, the woman the beloved. Now, in the urge of power, it is the reverse. The woman must submit, but deeply, deeply submit. Not to any foolish fixed authority, not to any foolish and arbitrary will. But to something deep, deeper. To the soul in its dark motion of power and pride. We must reverse the poles. The woman must now submit—but deeply, deeply, and richly! No subservience. None of that. No slavery. A deep, unfathomable free submission.” (ibid.)

「深い、測り知れない服従」というのは、言葉で言えば、たった一言で言える程容易であるが、得ることは不可能に近い程難しいであろう。Aaron も「手に入れられない」と言う。しかし、Lilly は男性が「愛の観念や意志を放棄」すれば、そして、

“Once man disengages himself from the love-mode, and stands clear. Once he stands clear, and the other great urge begins to flow in him, then the woman won't be able to resist. Her own soul will wish to yield itself.” (ibid.)

と Aaron に主張する。しかもこの前には、“every man must fulfil his own soul, every woman must be herself, herself only, not some man's instrument, or some embodied theory.” という前提があるのである。自分自身の魂が「完全」で、他の何物でもなく、「ただ自分自身」である状態という、Aaron が辛うじて至ることの出来た境地であり、且つ *Aaron's Rod* という作品の重要な主題の一つであるこの考えは、殆どの読者に然程抵抗なく容認されるであろう。また「力の衝動」というものが、「枯葉を排除し、新しい芽の発芽を促そう」とする程力強い生命の衝動であることも問題はないであろう。しかしこういう二つの前提条件から、己の生を全うするために、男性の内にある確固とした力の魂に女性が服従し、その上、男性も「個として確立した一人の男性の内にある、深い力に溢れた偉大な魂に服従」することになるという結論に、如何にして飛躍出来るのであろうか。愛を求めて泣き叫ぶ代わりに、深く測り難い力への衝動に対する服従が、計量することの出来ない「自由の服従」だと Lilly が強く主張したとしても、愛の方式が変わっただけで、それがそう簡単になされるであろうか。結局最後に Lawrence が望むのは、男の世界の確立であり、しかも女性は存在せんがためには男性に導かれ、更に一人の優れた男性に他の男性も女性も従うということである。そしてその優れた男性には自分になりたいという下心が見え隠れしている。

この結論の整合性のギャップを埋めるのは、作者 Lawrence にとって、たとえ可能であるにしても、未だかなりの時間が要求されることは想像に難くない。Lawrence の実生活を背景にした分身である Aaron は、作者の思想を背景にした分身 Lilly の主張に最後迄抵抗し、それを否定している。恐らく Lawrence は自分の理論の正しさは確信していながらも、それが実生活で運用されて行くには多くの抵抗があろうという、自分の思想の実践面での危うさを強く感じてい

たという意識が、こういう Aaron の態度に出ているのであろう。

だが、Lawrence, Aaron そして Lilly は三位一体の存在である。Lilly は Aaron の行動に思想的な意味付けを与えてくれ、魂の成長を導く役割を果たしてくれる精神的な指導者であり、生活面でも重い病から救ってくれたり、困難に手を差し伸べてくれたりする兄のような存在でもある。それ故、Aaron はもし「自分の強い自立心を、自分自身」を、明け渡さなければならないとしたら Lilly に明け渡したいと考えている。そんな時、彼の理論をなかなか納得しない Aaron にしびれを切らした Lilly は、今迄一般論として述べていた主張を、今度は Aaron 個人の問題として話し出す。

You, Aaron, you too have the need to submit. You, too, have the need livingly to yield to a more heroic soul, to give yourself. You know you have. And you know it isn't love. It is life-submission. And you know it. But you kick against the pricks. And perhaps you'd rather die than yield. And so, die you must. It is your affair."

There was a long pause. Then Aaron looked up into Lilly's face. It was dark and remote-seeming. It was like a Byzantine eikon at the moment.

"And whom shall I submit to?" he said.

"Your soul will tell you," replied the other. (ibid.)

服従しないのなら、君は死ななければならぬと、強要している Lilly は、Aaron の「誰に服従すべきか」という問いに、「君の魂が教えてくれるだろう」と突き放すように答える。Lilly のこの苛立ちの気持ちは、自分の思想に絶対の自信を持っているという確信が抱けない Lawrence の苛立ちであろう。更に、男性が優者であるという世界を説く Lilly=思想家 Lawrence は Aaron のこの問いに、「僕に従うべきだ」という答え⁽¹⁴⁾を用意していても、それを「愛の衝動」に引かれ勝ちな心の傾きを持っている Aaron=生活者 Lawrence に自信を持って言葉に出せない苛立ちでもあったろう。男性対男性の理想的な関係の探求の問題は、結末に来て最終結論は出ないまま未完となって、物語は終わるのである。

さて *Women in Love* で、Lawrence は、Birkin と Ursula を「星の均衡」という男女間の愛の理想境に至らしめた後、Gerald が死んだ時、男女の結び付きと同時に、男性同士の結合⁽¹⁵⁾を Birkin に語らせている。この男性同士の結合というテーマを継承発展させた小説が、*Aaron's Rod* である。当時の Lawrence にとって、現代人の愛と結婚の問題は依然として未解決で残っていた。実生活に於ける妻 Frieda との争いで、ともすれば弱い立場にいらながらも女性を愛さずにはいられない自分を奮起させ、女性の支配の及ばぬ男性優位の論理的確立が早急に望まれるのであった。そこで前作を引き継ぐ形で、Birkin=Gerald の関係に Lilly=Aaron の関係を移し換え、男性同士の永遠の結び付きの可能性を探ろうとしたのである。この様な状況で書かれたこの小説には、Lawrence の自己を取り巻く様々な問題が、苛立たしく投げ込まれている。己が位置を女性に優越しておきたいという、心の底からの願望がここではあからさまに示されており、

些か強引にその理論は進められ、作者の一方の分身 Aaron でさえ最後迄その論を認めることをためらっている程である。しかも Lawrence は女性との理想的な結び付きを果たしながら、男性優位の理論を唱えたいのである。彼が Whitman の中空の鷲の結合の状態になぞらえた愛の成就是正にこの願望の発露である。しかし後は男女間の愛は *Women in Love* で一応の決着を見たとして、それをこれ以上描く積もりはなく、男性同士の結び付きの世界に没入して行った。

それ故、この *Aaron's Rod* の主題は第一に主人公 Aaron の魂の完成にある。即ち彼は「世間一般の」道徳では許されない、理不尽な家出をするが、男女の愛は人間の魂の完成を目指す一過程という考えに従って、放浪の旅を続け最後に「単純にして寛大な個」を自ら所有することになる。だが Lawrence はここでは *Women in Love* に於けるようには男女の愛の理想は最後迄見せてくれない。第二には当然「男性同士の結合」の理想に行き着く。だが、この作品では作者 Lawrence の「愛」の観念に対する断罪ばかりが目につき、「力の衝動」への服従に基づく新しい人間関係の在り方は十分に描き切られていない。それ故、この第二の主題は、思想的に未成熟のため、ここでは明確な完成された姿を見せることはなく、次の作品 *Kangaroo* や *The Plumed Serpent* に引き継がれて行くのである。即ちこの作品は Lawrence の思想の焦点が男女の結び付きから、男同士の結び付きに移って行く過渡的な作品であるのである。

注(1) Letter to Lady Cynthia Asquith, 12 October 1917 (*The Cambridge Edition: The Letters of D. H. Lawrence, vol. III*, p. 168. 以下 *Letters III* と省略)

The police have suddenly descended on the house, searched it, and delivered us a notice to leave the area of Cornwall by Monday next.

(2) Lawrence, Frieda: *Not I, But the Wind...*: William Heinemann, 1935, p. 84

"When we were turned out of Cornwall something changed in Lawrence forever."

(3) Letter to John Middleton Murry, 23 May 1917 (*Letters III*, p. 127)

(4) Letter to Mark Gertler, 21 February 1918 (*Letters III*, p. 216)

I am doing some philosophic essays, also, very spasmodically, another daft novel. It goes slowly-very slowly and fitfully. But I don't care.

"another daft novel" というのが *Aaron's Rod* であり彼の手紙の中でここに初めて言及されている。だが創作には余り気が乗らないのがはっきりと分かる。

(5) Letter to Lady Cynthia Asquith, 8 January 1917 (*Letters III*, p. 70)

(6) 注(4) Letter to Mark Gertler, 及び Letter to S. S. Kotliansky, 27 May 1921 (*Letters III*, p. 728)

"I have nearly finished my novel *Aaron's Rod*, which I began long ago and could never bring to an end. I began it in the Mecklenburg Square days."

(7) Letter to Martin Secker, 18 July 1920 (*Letters III*, p. 572)

"I have got it 1/3 done."

(8) Letter to Robert Mountsier, [27 May 1921] (*Letters III*, p. 729)

"*Aaron* is finished, save for the last chapter."

Letter to Robert Mountsier, 1 June 1921 (*Letters III*, p. 730)

"*Aaron* is complete."

(9) "love and sacrifice are the finest things in life." (Chap. 8) と考える Jim Bricknell は、常に愛されたいと愛を求めている。だが愛が得られず、そのために "I'm losing life." と繰り返すを言いながら、パンをむさぼるよりに食べる。愛の飢餓感を食欲を満たすことで癒しているのである。Jim は作者に依って愛を自己の最終的な目的と

している人のグロテスクな戯画的な存在とされている。

- (10) Lilly が Aaron の身体に油を塗ってやる行為は *The White Peacock* で水浴びの後、George が Cyril の濡れた身体を拭いてやる場面、*Women in Love* の Birkin が Gerald にせまる Blutbrüderschaft の誓いなど、Lawrence の作品にしばしば登場して来る同性愛的傾向の行為と軌を一にしている。ここでは、同性愛的行為を描写しながらも、男性的な全体性の回復という作者 Lawrence の重要なメッセージを暗示していると考えられる。この男性同士の肉体的接触の行為は、「塩の柱」や「アロンの杖」等の聖書のイメージに加え、一層神秘的、宗教的、儀式的色彩が濃厚になっている。

Aaron がモーゼの兄でユダヤ最初の司祭長アロンを暗示し、肉体的、官能的生命力を象徴するなら、Lilly はモーゼの役割を果たしており、純潔、清純という百合のイメージを以て、知的、精神的象徴となっている。そしてこの相異なる二つの要素が結合合体して、男性としての完全な姿を表し、男性の完全な全体性を回復すると Lawrence は主張したいのであろう。

- (11) この愛のヴィジョンは *Women in Love* の「星の均衡」の状態とはほぼ同じ性愛の理想の境地と言えよう。しかし Lawrence の思想が男女の結合の問題から、男同士の結び付きに移行する過渡的な時期に現れた人物である Aaron は、最後迄この境地に到達することが出来ない。

- (12) *Aaron's Rod: The Cambridge Edition*, p. 313

- (13) Lawrence は *Fantasia of the Unconscious* に於て、人間に内在する二つの偉大な衝動として、「性的衝動」(sexual impulse) と「宗教的、或は創造的衝動」(religious or creative impulse) について述べ、religious or creative impulse が第一の動因であり、sexual impulse はその下に位置するとしている。

- (14) Lilly が、Aaron の服従すべき英雄的魂の所有者とは信じ難い。彼は終始「言葉」だけの人物であり、妻 Tanny との夫婦の関係となると、彼の説く「力の衝動」に基づく関係とは言えそうもない。Tanny は夫に対して「心の底から盲目的に反抗」したり、愛の亡者 Jim と親しげに振舞って夫をいらいらさせたりする。この様に Lilly は「愛」や「結婚」の絆から完全に自由になっているわけではない。

- (15) *Women in Love* の最終章「退場」の最後の部分で Birkin は Ursula と次の様な対話をする。

“Did you need Gerald?” she asked one evening.

“Yes,” he said.

“Aren't I enough for you?” she asked.

“No,” he said. “You are enough for me, as far as woman is concerned. You are all women to me. But I wanted a man friend, as eternal as you an I are eternal.”

“Why aren't I enough?” she said. “You are enough for me. I don't want anybody else but you. Why isn't it the same with you?”

“Having you, I can live all my life without anybody else, any other sheer intimacy. But to make it complete, really happy, I wanted eternal union with a man too: another kind of love,” he said.

“I don't believe it,” she said. “It's an obstinacy, a theory, a perversity.”

“Well—” he said.

“You can't have two kinds of love. Why should you!”

“It seems as if I can't,” he said. “Yet I wanted it.”

“You can't have it, because it's false, impossible,” she said.

“I don't believe that,” he answered.

ここで Birkin は Gerald との男同士の結び付きを男女の結び付きの補いとか代用物として求めているのではない。男女間の愛とは全く別の、新しい方向に在る可能性を求めているのである。それは性愛とは別の、独自の積極的な意味を持った男同士の暖かい触れ合いや完全な結び付きなのである。

参考書誌

1. *Aaron's Rod: The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence*: (ed.) Mara Kalnins: Cambridge University Press: 1988.
2. *Women in Love: The Cambridge Edition of the Works of D. H. Lawrence*: (ed.) Farmer, David, Lindeth Vasey and John Worthen: Cambridge University Press: 1987.
3. Boulton, James T. and Andrew Robertson (ed.): *The Cambridge Edition: The Letters of D. H.*

- Lawrence ; vol III*, 1916-21 : Cambridge University Press : 1984.
4. Huxley, Aldous (ed.) : *The Letters of D. H. Lawrence* : Heinemann : 1956.
 5. Moore, Harry T. (ed) : *The Collected Letters of D. H. Lawrence ; vol. I* : Heinemann : 1965.
 6. Aldington, Richard : *Portrait of a Genius, But...* : William Heinemann : 1950.
 7. Corke, Helen : *D. H. Lawrence : The Croydon Years* : University of Texas Press : 1965.
 8. Daleski, H. M. : *The Forked Flame : A Study of D. H. Lawrence* : Faber & Faber : 1965.
 9. Draper, R. P. (ed.) : *D. H. Lawrence : The Critical Heritage* : Routledge & Kegan Paul : 1970.
 10. Holderness, Graham : *Who's who in D. H. Lawrence* : Hamish Hamilton : 1976.
 11. Hough, Graham : *The Dark Sun : A Study of D. H. Lawrence* : Duckworth : 1956.
 12. Lawrence, Frieda : *Not I, But The Wind...* : William Heinemann : 1935.
 13. —————, (ed.) E. W. Tedlock, Jr. : *The Memoirs and Correspondence* : Alfred A. Knopf : 1964.
 14. Leavis, F. R. : *D. H. Lawrence ; Novelist* : Chatto & Windus : 1967.
 15. Moore, Harry T. : *The Intelligent Heart* : Farrar, Straus & Young : 1954.
 16. ————— : *The Life and Works of D. H. Lawrence* : George Allen & Unwin : 1951.
 17. Murry, J. Middleton : *D. H. Lawrence ; Son of Woman* : Jonathan Cape : 1936.
 18. Nehls, Edward : *D. H. Lawrence ; A Composite Biography ; vol. I, 1885-1919* : The Univ. of Wisconsin Press : 1977.
 19. ————— : *D. H. Lawrence ; A Composite Biography ; vol. II, 1919-1925* : The Univ. of Wisconsin Press : 1977.
 20. Roberts, Warrens & H. T. Moore : *D. H. Lawrence ; Phoenix II* : Heinemann : 1968.
 21. Tiverton, William : *D. H. Lawrence and Human Existence* : Rockliff : 1951.
 22. 井上義夫 : ロレンス : 小沢書店 : 1983.
 23. 伊藤整・永松定 : A. ハックスレー (著) : D. H. ロレンスの手紙 : 弥生書房 : 1971.
 24. 北沢滋久 : D. H. ロレンス : 墨水書房 : 1973.
 25. 倉持三郎 : D. H. ロレンス…小説の研究 : 荒竹出版 : 1976.
 26. 柴田多賀治 : ロレンス文学の世界 : 八潮出版 : 1974.
 27. 西村孝次 (編) : ロレンス : 研究社 : 1971.
 28. 羽矢謙一 : D. H. ロレンスの世界 : 評論社 : 1978.
 29. 村岡 勇 : D. H. ロレンス : 研究社 : 1970.
 30. 森 晴秀 : ロレンスの舞台 : 山口書店 : 1978.
 31. 山川鴻三 : 思想の冒険 : 研究社 : 1974.
 32. 山口圭三郎 (訳) : M. スピルカ (著) : 篠崎書林 : 1971.
 33. D. H. ロレンス研究会 : ロレンス研究—「アロンの杖」— : 朝日出版 : 1988.
 34. 二十世紀英文学研究会 (編) : D. H. ロレンス : 金星堂 : 1986.